

## 在日日系ブラジル人の研究の成果と課題

### —進路・就労選択を中心に—

桃原有都

#### はじめに

本稿の目的は、日本に定住する日系ブラジル人の進路研究の文献レビューを行うことで、これまでの進路研究の成果と課題を明らかにすることである。

日本に住む日系ブラジル人を取り巻く状況は、以下の3つが挙げられる。1つめは、雇用の調整弁として働いている日系ブラジル人が多いということである。厚生労働省の調査によると、ブラジル人の労働者135,455のうち、およそ54.6%にあたる74,025人が派遣・請負労働者である(厚生労働省2020)。リーマンショック、コロナショックをはじめ、日系ブラジル人は、経済不況下において最も雇用を失う機会が多いマイノリティの1つであると言える。2つめは、日本語習得に困難を抱える日系ブラジル人の数が多いことである。ただでさえ学習場面で用いる言語(学習言語)の習得が5~7年かかると言われる中、日系ブラジル人の子どもは、漢字の習得にも困難を抱えている。文部科学省(2019)の調査によると、日本語指導が必要な外国籍の児童生徒の母語別在籍状況では、ブラジル人の母語であるポルトガル語が10,404人となっている。日本語指導が必要な外国籍児童生徒の総数40,485人の約26%の人が、ポルトガル語を母語にしており、この数字は中国語9,600人の24%、フィリピン語7,893人の19%より多い。日系ブラジル人は、日本語習得に最も困難を抱えることが多い外国人の1つだといえる。3つめは、日系ブラジル人の多くが集住地域に住むことである。製造業が盛んな自治体へ集住する傾向がある日系ブラジル人は、集住することによって同じ言語を話す住民が多いという安心感を覚える一方、日本語を使う機会が相対的に少なくなることで、日本語習得により一層困難をきたすことになる。フィリピン系の外国人の研究では、「フィリピン系第二世代の場合、メンバー同士が互いの子どもを監督するようなエスニックコミュニティが不在」(額賀・三浦2017:137)であることが論じられている。集住することで、日本語、日本の生活様式から距離があることは、他のニューカマーにはない特徴の1つであると言える。

本稿のレビューの対象となった学術雑誌は、主に『教育社会学研究』、『異文化間教育』などである。日系ブラジル人の進路に関わりのある大学紀要の論文および書籍も分析の対象とした。日本語教育の分野の研究は検討の材料として用いなかった。

本稿の独自性は、あくまで日系ブラジル人の進路に絞ってその成果と課題を示すことにある。本稿と同じく、外国人の子ども<sup>1)</sup>の研究をレビューした研究として、相良(2019)、志水など(2014)がある。相良(2019)はニューカマー<sup>2)</sup>全般の進路・移行研究のレビューを、志水など(2014)

は、マイノリティ全般（部落問題、障害者、外国人）の研究をレビューしている。相良（2019）と志水など（2014）においては、広くニューカマー研究全般に焦点を当てていた。一方で、日系ブラジル人の高校中退についての研究である児島・中島（2015）や、高等教育まで進学した日系ブラジル人の研究である山ノ内（2015）などの重要な後続の研究が扱われていなかった。そこで、本稿では日系ブラジル人の進路に絞って研究のレビューを行った。

以降、第1章では、家庭からの進路選択への影響についての研究の動向を示したい。保護者の子どもの教育への期待の有無が、進学に大きな影響を及ぼしていることが明らかにされている。続く第2章では、コミュニティからの影響についての研究の動向を示したい。友人、親戚などの家庭以外のアクターが子どもの進学に影響を及ぼすことが、先行研究では明らかにされてきた。第3章では、日系ブラジル人の進路研究の成果と課題を示す。これまでの日系ブラジル人の進路の研究の成果を整理し、今後の日系ブラジル人の進路の研究に求められることを示したい。

## 1. 保護者からの影響

本章では、日系ブラジル人の進路に対する家庭の影響について整理する。保護者からの影響としては、学校を早期に離脱する者たちの研究では、頻繁な移動と、保護者の教育への理解が乏しいことが背景であると明らかにされた（第1節）。高等教育へと進学する者たちの研究では、保護者の教育への高い期待が影響していることが明らかにされた（第2節）。

### (1) 学校から離脱する背景

早期に学校から離脱した日系ブラジル人の研究では、頻繁な移動と、保護者の教育への理解が乏しいことの2つが明らかにされている。児島（2008）は、早期の離学の原因として頻繁な移動が存在することを明らかにしている。日系ブラジル人は、来日後もよりよい労働環境を探し求め、国内で頻繁な移動を行うことが示されている。日本国内で頻繁に移動する、あるいはブラジル本国への帰国と日本への再来日を繰り返すことによって、日系ブラジル人の子どもは、日本語習得や、学習の積み上げ、そして友人関係を築くことに困難を感じる事が指摘されている。

また、児島（2008）は、保護者の日本の教育への理解の乏しさが、早期の離学に関わっていることも示している。日本で生活していくうえで、中卒では仕事を選べないことは日本人にとっては周知の事実である。一方、日本語能力が低く、日本の進学情報に乏しい日系ブラジル人の保護者は、子どもの早期の教育からの離脱を引き止めないことが報告されている（児島 2008）。例えば、中3の時に1か月学校に行かなかった子が『学校が嫌だから、別に仕事をしてもいいじゃん』と言ったら、とりあえず許してくれた」（児島 2008: 68）という事例があった。日系ブラジル人の保護者にとっては、日本の学校の情報を手に入れにくいことも相まって、進学することに重要性を見出しにくい場合がある。

## (2) 高等教育に進学する背景

親からの影響として、保護者の教育への高い期待が、進路選択に影響を与えることが示されている。山ノ内（2015）では、母親の高い教育への期待が示されている。母親自身の学歴は小卒と決して高くはないものの、母親自身が、自分の妹2人を大学まで進学させ、母親になってからは自分の子どもの学校行事に積極的に参加するなど、向学校的な文化を有していた。例えば、子どもが勉強するためのサポートや、学習塾に通わせるなどである。その結果、自身の息子が高等教育に進学し、専門職を得たことが明らかにされている。

同様に児島（2018）からも、母親の教育への高い期待が示されている。日本の学校で学ぶ内容について、母親から具体的なサポートはなかった一方で、日本のブラジル人学校で働く母が、子どもに熱心にポルトガル語を教え、子どもの成績に注意をはらうなど、学ぶことを重視した家庭環境で育ったことによって、子どもは大学院へ進学できたことが明らかにされている。

山ノ内（2015）は研究参加者となった日系ブラジル人の家庭から、進路支援のあり方を学ぶことができる指摘している。親に対して進学や就職への十分な情報提供を行うなど、保護者への支援をすることが進学を促すために重要だと指摘している（山ノ内 2015: 220）。

## 2. コミュニティからの影響

本章では、コミュニティからの子どもの進路への影響について整理する。コミュニティの影響として、学校から早期に離脱する日系ブラジル人の研究からは、反学校的な日系ブラジル人グループからの影響と、早期に学校から離脱した日本人のグループからの影響が示されている（第1節）。高等教育まで進学した日系ブラジル人の研究では、親戚や友人からの影響や、同じ宗教的背景をもつ人たちからの影響が、進学に有利であることが示されている（第2節）。

### (1) 学校から離脱する背景

学校から離脱する背景として、コミュニティからの影響は以下の2つが先行研究では示されていた。それは、反学校的な日系ブラジル人のグループの影響と、早期に学校から離脱した日本人からの影響である。

まず反学校的な日系ブラジル人のグループからの影響について示したい。国内・国外問わず、頻繁に移動することによって、学校内で特定の間人関係を結ぶことが難しくなる。そうしたことによって、日系ブラジル人はしばしば自らの承認欲求を満たしてくれる、学校外の非行グループに参加することが示されている（児島 2008）。反学校的文化を有する同胞の非行グループへ参加することで、日系ブラジル人の青年は、ますます学校から遠ざかっていくことがある。また、日本人・日本語中心の学校のなかで、日系ブラジル人たちは集団として独自の対抗文化を形成することがあることも示されている（児島 2001; 山ノ内 1999）。例えば性や恋愛に積極的な姿を示す、あるいは過度に消費行動に出ることで、日本社会に「抵抗」することである。しかしなが

ら、反学校的文化をもち続け、積極的に学習しなかったことによって、高校に進学することが難しくなる事例も存在している（児島 2001）。

次に、早期に学校から離脱した日本人からの影響について示したい。日本の高校を中退した 1 人の日系ブラジル人生徒は、すでに就労している日本人の友達の多くが金銭的に余裕のある生活をしているのを羨み、高校を中退している（児島・中島 2015）。日本人グループからも、日系ブラジル人は影響を受けることが示されている。

## (2) 高等教育へ進学する背景

進学の間機を得た背景として、日系ブラジル人の親戚や、友人との付き合い、同じ宗教的背景をもつ人とのつながりをもつこと、あるいは日系ブラジル人の子どもとの付き合いを控えることもあることが明らかにされている。まず、親戚との付き合いが進学に有利に働いたケースについて示したい。児島（2016）では、エスニックな共同性の影響が示されている。中学校における先輩後輩関係、怖い先生の存在、校則など、中学校の「息苦しさ」を軽減してくれたのが、日系ブラジル人のエスニックな共同性であることが示されている。親戚の集まりなどのブラジルの環境が、日本の学校文化の「異様さ」を相対化する役割を果たしたとしている。

日系ブラジル人同士のつながりとして、教会のネットワークが存在することが、児島（2018）では示されている。留学先での訪問の際には、同じ協会の信徒であるからという理由で自宅に宿泊させてもらうことが示されている。また、大学院進学の際には、アパートが決まるまで、宿泊や引っ越しの作業を同じ信徒に手伝ってもらうなどのサポートを受けることができた。他にも、教会に足しげく通ったことで、社会経済的状況が同じような「教会の子たち」と安心して話すことが可能になった事例があった。教会ネットワークという社会関係資本が、アイデンティティへの肯定感や、進学の際のサポートに有効に働くことが示されている。

一方で、日系ブラジル人の友達と、極力付き合いを避けることによって、進学できたという語りも存在する。山ノ内（2015）の研究では、「ブラジル人の男の子たちと一緒に遊ばせないようにした」（山ノ内 2015: 24）ことが、子どもが一番の成功の秘訣として語られている。山ノ内（2015）が論じるように、この「事例で在日ブラジル人の教育をすべて語ってしまうのは危険である」（山ノ内 2015: 24）ものの、子どもの今後の日本での生活を見越して、日系ブラジル人のコミュニティから一定の距離を取ろうとする者も存在する。

## 3. 日系ブラジル人の進路研究の成果と課題

第 3 章は、第 1 章と第 2 章を踏まえ、これまでの日系ブラジル人の進路・就労選択に関わる先行研究の成果と課題、そして今後の研究に何が求められるか示したい。第 1 節では先行研究の成果、第 2 節では先行研究の課題を示すこととする。

## (1) 先行研究の成果

先行研究の成果は、以下の2つが挙げられる。1つめは、保護者の影響が検討されてきたことである。これまでの研究では、保護者の教育への期待が高いかどうか、子どもの進学に大きな影響を及ぼすことが示されている。つまり、中卒では仕事を探すことが難しい日本の労働環境について、日系ブラジル人の保護者の理解が乏しいことが、早期の学校からの離脱の背景であることが明らかにされている。一方、高等教育に進学する日系ブラジル人の研究では、保護者、特に母親が子どもの教育に熱心に働きかけたことが、進学することができた要因の1つであることが明らかにされている。

2つめは、コミュニティについての研究も進展してきたことである。早期に学校を離脱した背景として、親からのサポートの不足や、反学校的学校文化を有するエスニックグループの影響、消費社会に耽溺する同胞集団からの影響、あるいは日本人の集団からの影響があることが明らかにされている。一方で、高等教育に進学した日系ブラジル人においては、親戚との付き合いや、宗教的なネットワークが支えになったことが示されていた。加えて、日系ブラジル人とあまり付き合わないことによって進学が可能となった事例も示されていた。

## (2) 先行研究の課題

先行研究の課題について、ここでは3つを挙げておきたい。1つめは、今後の日系ブラジル人の進路の研究は、家庭背景に着目して高校進学後の進路の研究を行う必要があることである。日系ブラジル人が定住しつつある中で、進路の研究は、当初は小・中学校段階の研究が多かったものの、徐々に高校、高等教育へ研究の範囲が広がっていった。そして、近年の外国人の子どもの研究では、母国ブラジルへ帰国した人の研究も蓄積が見られるようになった（ハヤシザキなど 2013; 山本 2014; 児島・中島 2015）。

それでも日系ブラジル人の高校進学後に着目する必要がある理由は、高校を中退した日系ブラジル人の研究では、家庭背景まで射程にとらえた研究が必要であると考えられるからである。高校を中退した理由を検討した研究（児島・中島 2015）では、高校を中退した理由として、学習への忌避感や、消費社会からの誘惑があることが明らかにされている一方、家庭背景までさかのぼって検討していなかった。児島（2008）の研究では、保護者が日本の教育への理解が乏しいことによって、中卒、あるいは中学校中退などに陥ることが指摘されていた。高校中退の理由としても、児島（2008）の研究と同様に、保護者の情報が少ないことで中退するのか、あるいは学力的な問題によって高校を中退するのか、今後検討する必要がある。

2つめは、コミュニティについての研究を今後さらに進展させることである。ここではコミュニティを、日系ブラジル人のコミュニティと、日本人のコミュニティに分けて振り返りたい。まず日系ブラジル人のコミュニティの捉え方が、同じ高等教育まで進学した人の間でばらつきが見られた。山ノ内（2015）の研究では、「ブラジル人の男の子たちと一緒に遊ばせないようにした」（山ノ内 2015: 24）ことが、子どもの一番の成功の秘訣であると示されている。一方、家族親戚

の「ブラジル人らしさ」(児島 2016) や、教会の人間関係が助けになったことが語られている(児島 2018)。このようなコミュニティに対する認識のずれがあるなか、今後の研究としては、なぜ日系ブラジル人の集まりに対して認識のずれが生じるのかを、今後は検討していく必要がある。

加えて、高校進学後の、反学校的文化を有する日本人のグループからの影響も、今後検討すべきことの1つである。学習場面で用いる学習言語の習得には5~7年かかると言われ、漢字の習得に困難を抱える中、日系ブラジル人の青年たちは低い偏差値の高校に進学することが多い。高校を中退する者が偏差値の低い高校に多いなか、高校に進学した日系ブラジル人青年は、同じ学校に通う日本人のグループからどのような影響があるのか、今後も研究すべきである。児島・中島(2015)では、学習への忌避感や、就労を選択した日本人の知り合いが、金銭的に余裕のある生活をしているのを見て惹かれることが、高校中退の理由であることを明らかにしている。ただ、それだけでなく、他にも理由があると考えられる。例えば、高校に入ってより一層勉強が難しくなるなかで、改めて日本語力が乏しいことに気付くことが考えられる。また、日本語力が足りないことを知っていても周りの人のサポートが少ないことも、高校中退の背景であると考えられる。あるいは日本人が多い環境に急に変わることによって、人間関係の難しさを経験する可能性もある。

外国人の青年の高校段階の研究としては、志水(2008)による、大阪府の高校の事例の研究がある。中国系のニューカマーが多い大阪府における、外国人生徒への教育支援の事例が検討されている。しかし、「しんどい子」に力を注ぐ文化が浸透している大阪府の高校とは違い、他の自治体では、義務教育段階にあたる高校の日本語教育は、あまり充実していない。加えて、伊藤・富永(2011)、山ノ内(2015)、児島(2016)のように、高校に進学した日系ブラジル人の研究では、高校段階でどのような日本語指導を受けたのか言及されていなかった。日本語指導が不足している高校生活の中で、日系ブラジル人青年がどのような経験をするのか、今後も検討すべきことである。

3つめは、集住することについての研究を進展させていくことである。集住することの影響は、今後も検討すべきことの1つである。児島(2020)では、日系ブラジル人自身から、日系ブラジル人のコミュニティで暮らさなかったことが、日本語習得の助けになったことが語られている。例えば、『『そこ(=ブラジル人集住地域)にいたら日本語も学べない』』、『『集住地域じゃなかったからこそ、多分これぐらい日本語が話せるようになった』』(児島 2020: 24)と、日系ブラジル人自身から語られている。集住することは、日本語習得にとってどちらかと言えばマイナスに働くことが示されている。

一方で、日系ブラジル人にとって、集住することはプラスに作用することも考えられる。例えば、日系ブラジルのコミュニティは、日本語が通じなくても生活できるという便利さや、親の威厳を保ちやすいという利点も存在する。アメリカの移民研究では、親が子どもの監督をできない、それどころか言語・文化的にホスト国に近い子どもに頼るといった、「役割逆転」(role reversal)

が生じることが明らかにされている。アメリカの場合、移民の子どもが、親よりも早く英語を話せるようになることによって、「あまりにも早く親の監督から自由になってしまう」(Portes&Rumbaut 2001=2014: 109)と示されている。日本の文脈に置き換えて考えると、親が日本語を話せないことで、子どもは自分の親に敬意をもって接することが難しいということになる。加えて、日本人が自分の周りに急激に多くなる高校段階において、日本語が話せない日系ブラジル人のコミュニティ、つまり日系ブラジル人の保護者や友達、親戚を蔑視し、日本人のコミュニティに親和性を感じるということは十分考えられることである。こうした日本人、日本人中心的社会への同化は、多文化共生の道りに逆行することであって、決して望ましいことではないと言える。日系ブラジル人の研究としては、集住することがはたしてどのような影響をもたらすのか、今後も検討していくべき課題であると言える。

## おわりに

本稿では、日系ブラジル人の進路研究の研究レビューをすることによって、これまでの研究成果と課題を示した。本稿は、これまでのレビュー論文がニューカマー全般の研究レビューをしていたなかで、これまでのレビュー論文が見逃してきた日系ブラジル人の進路の研究として重要な研究を含めてレビューすることができた。本稿で日系ブラジル人の進路の研究を整理した結果、これまでの研究成果としては、日系ブラジル人の進路の研究では保護者の影響・コミュニティの影響が検討されてきたことがわかった。

他方、以下のように課題も存在していた。それは、高校を中退した背景を家庭背景の面から検討すること、日系ブラジル人のコミュニティ・日本人のコミュニティからどのような影響があるのかを検討すること、そして集住することの影響を検討することであった。本稿で明らかになった研究の課題を踏まえて、今後の日系ブラジル人の進路の研究が蓄積されることが望まれる。

## 〔注〕

- 1) 本稿では、「外国人の子ども」を、以下の3つのいずれかであると定義する。それは、①本人が外国籍の子ども、②保護者のいずれかが外国籍、③日本国籍をもち、家庭内言語が日本語以外の子どもである。
- 2) 本稿では、「ニューカマー」の語を使用することは極力さけた。日系ブラジル人の大量来日があった1990年から30年以上過ぎ、日系ブラジル人を新規来日者として捉えることは難しくなりつつあることが理由である。

## 〔文献〕

ハヤシザキカズヒコ・山ノ内裕子・山本晃輔,2013,「トランスマイグラントとしての日系ブラジル人—ブラジルに戻った人々の教育戦略に着目して」志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛冶到・

- ハヤシザキカズヒコ編,『「往還する人々」の教育戦略—グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』明石書店,206-267.
- 伊藤悦子・富永優花,2011,「日系ブラジル人のアイデンティティと進路選択—『特色ある公立高校』とブラジル人学校の比較—」『京都教育大学紀要』119: 179-194.
- 児島明,2001,「第2章『創造的適応』の可能性とジレンマ」志水宏吉・清水睦美編,『ニューカマーと教育』明石書店.
- ,2008,「在日ブラジル人の若者の進路選択過程—学校からの離脱/就労への水路づけ」『和光大学現代人間学部紀要』1: 55-72.
- ,2016,「ニューカマーは差異をどう生きるか—あるブラジル人青年の学校段階間移行の経験に注目して—」『地域教育学研究』8(1): pp.41-47.
- ,2018,「ニューカマー二世世代のトランスナショナルな生活と教育達成—日本の大学を卒業したあるブラジル人女性の経験に注目して—」『地域教育学研究』10(1): 18-25.
- ,2020,「地域日本語教育をだれが担うのか—ブラジル系移民二世世代の日本語習得とその後—」『異文化間教育』52: 18-36.
- 児島明・中島葉子,2015,「トランスマイグ란トの時代におけるブラジル人青年の教育研究—学校教育と学校外教育の両面から—」『鳥取大学地域学部紀要地域学論集』12(2): 75-103.
- 厚生労働省,2020,『「外国人雇用状況」の届出状況まとめ(令和元年10月末現在)』,厚生労働省ホームページ,(2020年2月3日所得,[https://www.mext.go.jp/content/1421569\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1421569_002.pdf)).
- 文部科学省,2019,「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成30年度)」文部科学省ホームページ,(2020年1月7日所得,[https://www.mext.go.jp/content/1421569\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1421569_002.pdf)).
- 額賀美沙子・三浦綾希子,2017,「フィリピン系ニューカマー二世世代の学業達成と分岐要因—エスニック・アイデンティティの形成過程に注目して—」『和光大学現代人間学部紀要』10: 123-140.
- Portes, A. and Rumbaut, R. G.,2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, Berkeley: University of California Press. (村井忠政・房岡光子・大石文朗・山田陽子・新海英史・菊池綾・阿部亮吾・山口博史訳,2014,『現代アメリカ二世世代の研究—移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店).
- 相良好美,2019,「ニューカマー青年研究の動向と展望—進路・移行をめぐる研究を中心に—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』58: 297-306.
- 志水宏吉・高田一宏・堀家由紀代・山本晃輔,2014,「マイノリティと教育」『教育社会学研究』95: 133-170.
- 山本晃輔,2014,「帰国した日系ブラジル人の子どもたちの進路選択—移動の物語に注目して—」『教育社会学研究』94: 281-301.
- 山ノ内裕子,1999,「在日日系ブラジル人ティーンエイジャーの『抵抗』—文化人類学と批判的教育学の視点から—」『異文化間教育』13: 89-103.



山ノ内裕子,2015,「日系ブラジル人家族の進路選択と教育戦略—日本で高等教育を終了した日系ブラジル人青年とその母親のライフヒストリーから」『関西大学人権問題研究室紀要』69: 1-24.

〔謝辞〕

本研究を進めるに当たり、助言者の古殿真大さんには多大な助言を賜りました。厚く感謝申し上げます。また、研究の方向性を指し示していただいた教育社会学領域のみなさまにも、感謝の意を表します。教育論叢の検討会に立ち会っていただいたみなさまにも、研究上のアドバイスを賜りました。この場を借りてお礼申し上げます。

**A Review of Research on Japanese Brazilians in Japan**  
**– Focusing on Career Formation and Transition–**

MOMOHARA Yuto